

## 60. 慢性期障害者の健康管理の課題とその対策

病院障害者健康増進・運動医科学支援センター 矢田部あつ子 富安幸志

自立支援局所沢センター利用者と、病院障害者人間ドッグ受診者の健診結果から、慢性期障害者の健康管理について考察した。

【対象】①令和2・3年度入所時健康診断を実施した利用者(第2自立訓練部は除く)178名。

②令和3年度人間ドッグ受診者26名。

【方法】①②について、それぞれ障害種別及び年齢別に分類し、特定保健指導項目であるBMI 血圧 HbA1c TG HDL-choについて、特定保健指導域で比較した。また②の対象については、障害種別 年齢別 受障歴別に分類し、問診票の各回答を比較した。

### 【対象①の結果】

1)障害種別は、視覚障害88名(49.4%) 高次脳機能障害56名(31.4%) 肢体不自由24名(13.4%) その他10名であった。年齢層は10~70歳代と幅広く平均39.2歳であった。2)BMI25以上56名(31.4%)のうち、高次脳機能障害と視覚障害が89.2%を占めていた。3)血圧指導域該当者50名(28.0%)のうち、52%がBMI25以上であり( $p<0.01$ )、78%が40歳以上であった( $p<0.001$ )。4)HbA1c指導域該当者48名(26.9%)のうち、95.8%が高次脳機能障害と視覚障害であり( $p<0.017$ )、56.2%がBMI25以上であった( $p<0.001$ )。また40歳以上が91.6%を占めていた( $p<0.001$ )。

### 【対象②の結果】

1)障害種別は、肢体不自由25名(脊髄損傷15 脳性麻痺6 脳疾患4)、視覚障害1名であった。40歳代が最も多く(42.3%)、平均54歳であった。2)BMI25以上は12名(46.1%)であった。3)血圧指導域に該当する者は13名(50%)であった。4)TG HDL HbA1cについて、各指導域に約25%が該当した。4)問診票では、障害歴が長い者ほど「移動困難」「痛み」「筋力低下」「疲れやすい」などの訴えが多く、例年同じ傾向がみられている。

### 【考察】

1)視覚障害及び高次脳機能障害、肢体不自由者の肥満の主な原因は活動量不足であり、運動や食事面などの日常生活習慣への介入が必須である。しかし地域で暮らす障害者は、体重測定や健康診断受診が容易でなく、自身の健康状態を把握しにくい状況である。また生活習慣の変容は、本人だけでは実行困難なことが多く、障害特性に対する配慮や支援が必要である。そのため障害者の健康管理や生活習慣病対策には、医療や福祉など多様な支援が望まれる。

2)加齢による活動機能の低下は生活習慣病の誘因になる。筋力・持久力や痛みなどの身体機能を客観的に評価し必要な対応を行うなど、活動機能の低下を予防する対策が必要である。

### 【まとめ】

障害者は、体重増加や活動機能の低下により、活動量の低下や生活習慣の変化が生じやすい。そのため活動を維持することが健康管理の課題となる。今年度より生活習慣病予防を目的とした所沢市特定健診を開始した。内科的所見を軸に、生活習慣や活動機能低下について適宜他科他職種と連携した適切な介入を行うことで、障害者の健康の維持増進に役立てたい。